

黒いブードル、ダックスフント、チワワ…。新緑がまぶしい午後の堀江公園には、いかにも血統書付と思われるペットたちがすまし顔で散歩している。小さなブランコやすべり台、柵のある砂場では、よちよち歩きの幼児たちが、母親に手を引かれてやってきては、笑い声をたてたり泣きべそをかいたり。ベンチでうたたねをしているおじいさんもいる。

しかしここは堀江。正午にもなると、近隣の商店や事務所のOLがランチを楽しみにやって来るし、夜には、仕事を終えた社員や若い買い物客が立ち寄る。大人の憩いの場としても、深夜まで人の姿が絶えない。

そんな堀江公園に面して、近年おしゃれな路面店が増えてきた。目を引くのが、キッズご用達の店。ウインドウには子供服や輸入雑貨などがずらり！オレンジストリートや北堀江とはまた少し違った、のんびり感の漂う雰囲気の特徴だ。

白い壁に水色の屋根、2階建ての“小さなお家(ルビ:うち)”は「swap meet market」。ヨーロッパのデッドストックを活用して作られた、各1点もの子供服、雑貨、アンティーク家具などが並ぶ。大きな窓を通して公園から光が差し込み、明るく気持ちがいい。

株式会社フィス、スワップミートマーケット事業部営業担当の大村さんはこう話す。「もともと子供服専門のメーカーでしたが、この店舗のため、新たに雑貨や家具を外国から仕入れて総合プロデュースを行い、トータルでの生活提案に挑戦しています。」この建物は、昭和10年頃にできたもので、数年前まで1階はそば屋、2階は住居だった。そのぬくもりを有効に生かすため、1階の天井を抜いて吹き抜けにしながら、町家ならではの黒柱や梁、小さな出入り口や扉、ベランダなどはそのまま残している。2階に上がると、子供部屋にいるような感じだ。

店長の中井香奈恵さん一押しの雑貨は、キ

ュートなネコたちやおばさんなど紙箱人形を積み重ねるフランス製のおもちゃ。オブジェとしても、とってもおしゃれで「それ、いただきます！」とつい買ってしまった。店舗内のやさしい雰囲気と他にはない商品に魅せられ、近所からも遠方からもリピーターが増えているという。

公園サイドには、他にもあちこちに子供服の店がある。例えば、サングラスをかけた女の子“ミニちゃん”がキャラクターである「HYSTERIC MINI」では、ベビーカーを押したママ達がゆったりお買い物。むずかる子供たちにはビデオコーナーもある。Tシャツ1枚6千円前後！水着はその倍以上。ハット帽やバンダナ、ハーフパンツを着こなしたママ達が、何品も購入していた。

「シサム工房」では、ランプやかばん、アクセサリー、オーガニックの衣類や家具など、手作り感あふれる雑貨を置いている。伝統文化や手仕事、環境や健康に留意し、タイやネパールなどの途上国自立支援の商品も扱っている。その志が公園の空気ともあわさって、優しい気持ちにさせてくれる。木材や家具屋が多い堀江らしく、ここも「伊丹木材」の1階部分を借り受けてリフォームしている。

「ミュゼ大阪」は、堀江に住むプロデューサーであった故・日隈萬里子さんが「公園をみながら珈琲を飲む店を」とつくったもので、カフェブームの火付け役となった。3階のバーは、半分テラスになっているため、公園を見下ろし夜の風に吹かれながら、深夜2時まで楽しめる。来年10周年を迎える。

他にも音響デザイナーの事務所に並ぶ「Cafe Mode」や、編み物をしながら喫茶を楽しむ「sept mignon」など、ユニークなコンセプトのカフェも出てきた。

ところで、この堀江公園は、住民のワークショップによる再整備が進行中である。大阪市ゆとりとみどり振興局主催、(財)大阪市公

園協会が事務局で行う「みんなのわくわく公園づくり」事業の一環で、堀江公園では2005年の1月から4回ワークショップが開催された。50人以上の住民が集まり、グループごとに公園の使い方を議論。その結果、幼児を対象としたエリアを交番のそばへ、ゲートボールのできるエリアを、住民が集まる「堀江会館」近くに設定、北半分のこの2つのゾーンは、4月に改修工事が終了した。南半分の小学生対象のエリアとフリーエリアは、今後改修される。治安を考慮して、トイレや水のみ場は設けず、また車椅子の方にも気軽に訪れてもらえるよう、遊歩道を設け段差をなくした。

中心となってワークショップを進めた菊池廣さんによると「基本的に住民自身で管理できる、安全で清潔な公園づくりを目指しました。隣の区からわざわざ遊びにくる母子の姿もある。桜の時期には、堺からも大勢が花見にやって来た。「きれいな公園だから、と言われるとくすぐったいような、嬉しいような。」しかし翌朝には、大量のゴミが・・・。「それぞれの利用者の調和が難しいですね。」最近できたマンションに引っ越してきた人が、新しくなった公園の清掃に参加することも増えてきたそうだ。

ファッションの街として脚光を浴び、同時に職住隣接する堀江において、公園は大切な役割を果たす。地元の方々の苦勞で維持管理されてきたからこそ、周辺の店づくりも、より魅力的に生きてくる。

堀江公園とそのパークサイドは、住民にとっては日常生活を彩る贅沢な空間、ビジターにとっては、過密な大型複合商業地に疲れた心を癒す場でもある。これからも都心のオアシスとして、幾層ものファンを静かに増やしていくだろう。

<店情報>

swap meet market

西区南堀江1-14-21 定休日なし
(展示会の場合のみ、休み) 11時~17時
電話: 06-6538-8448

シサム工房

西区南堀江1丁目 堀江公園東に面す
電話: 06-6533-0577
12時~20時 定休日なし

ミュゼ大阪

西区南堀江1-21-7
電話: 06-4391-3030
カフェ、11時半~2時AM(日曜は0時)
サロン 7時PM~2時AM

Sept mignon

西区南堀江1-14-29
電話 06-6531-7677
2Fカフェ 11時~21時
(1F、3Fは20時まで)

H Y S T E R I C M I N I

西区南堀江1-12-19
電話 06-6535-7666
10時半~19時 年未年始以外定休日なし

中津の淀川近く、マンションの地下1階にある「カンテ・グランデ本店」。鮮やかな緑と花に覆われた小さなゲートを降りると、赤・白・青・緑・黄色のエスニック風の小さな旗が連なったアーチとともに、手入れされながらもものびのび育った植物たちが圧倒的な迫力で出迎えてくれる。店内は、天井が高く広いが、独特なぬくもり感が伝わる。

店のテーマは「インド」。メニューはチャイをはじめ、インドカレーやチャパティ定食などなど。壁や棚には手織りのタペストリーや操り人形、素焼きの動物、天井からはモビールやランプシェード。雑貨コーナーもある。机や椅子をはじめインテリア、バックミュージックまですべてインドのものだ。

1973年7月のオープンから今日まで三十年以上。7支店を展開しながら本店を維持継続し、多くの人々に愛されるまでに育てたオーナーは、井上温(やすし)さん、64歳。インドの風土を反映したかのような、彫りの深いやさしい笑顔の持ち主である。

自宅の庭を喫茶店に

井上さんは、1943年(昭和18年)中津で生まれてから今日までずっとこの町で暮らしている。父親が亡くなってから、知人にも勧められて、両親の実家の20坪の庭に喫茶店をつくった。

「カフェという言葉もなかった時代で、おつり用に新札を用意するほどこぎれな店づくりをしました。それが、下駄ばきの地元の人には綺麗過ぎて、気軽に入れなかったようです。一方で、噂を聞いてやってきた神戸や奈良ナンバーの車がずらりと並んだ。

そんな折、自身も紅茶が好きだったことから、友人たちが企画した紅茶の原産国とその周縁国をめぐる旅行ツアーに便乗した。店をはじめて2年後のことだった。

無秩序と偶然性の面白さ

「特にインドでは、驚くことばかりでした。すべてがルーズなんです(笑)。ボロボロのタクシーは時間に遅れるのが当たり前、ホテルも、白いはずのタオルが灰色で椅子も座っていいのかわからない位汚れている。でも自然が豊かで、田舎は舗装している道路がなく、小鳥の鳴き声が聞こえる。そんな中、自分の乗ってきた車が唯一の文明で、醜かった。」

そんな井上さんは、インテリアや雑貨にも心引かれた。

「自然の風合いに癒されました。手織りだったり、日本にはない独特の色合いだったり。素焼きの動物も、たぶん実際には見たことがないのを創造してつくっているんですね。そういえば、店に置いてある埴輪のような動物も、トラやキリンに似ているようで全く違う、ユニークな風体をしている。

「むちゃくちゃでファジーで何の計算もされていない。でもその中で、時々偶然に、すごくいいものができてくるから面白い。」「らくだがまちを歩いていて、像がタクシーがわり。野生の孔雀が店のまわりをうろうろしている。大阪のような大都市でも300頭の羊が道を横断するんです。所有者がわかるように印がついた、例えばピンクの水玉模様の羊がどつと道を横切る。これはポップカルチャーですよ！本当に混沌としていてねえ(笑)。」

心も体も溶けるほどのリラックスを

目じりを下げて、楽しそうにインドの体験を語る井上さんだが、もっとも衝撃を受けたこととは...?

「なんといっても、子供たちの笑顔です。本当に心の底から笑っているいい顔なんです！道端に座っているような貧乏な暮らしなのに。それに比べると日本人の笑いは、ひきつっているだけ。“幸せっていったいなんだろ

う”と思わざるをえなかった。

飲食店に入ると、女の子が、私の顔のまん前で頬ずえをついて、にっこりど“MAY I HELP YOU?”みんな人なつこいんですね。そんな店では自分が溶けるかと思うくらいにリラックスできました。

私の店とは180度違っていた。帰国後、インドで仕入れたインテリアを置いて雰囲気を変え、チャイやチャパテイも始めました。」

実家をマンションに建て替える際、店を地下1階に改装した。井上さんは、必ず毎朝11時にここでお茶を飲む。

「まず自分が心からリラックスしたい。それができれば、お客様の何割かは必ずくつろいでいただけていると思っています。」

いつまでも完成しない店づくり

井上さんとインドを結びつけるような、不思議なエピソードがある。

「もともとざっくりしたやわらかいものが好きだったんですね。学生時代、親からもらった小遣いではじめて買ったシャツが、実は、インド綿のストライプ柄だった。

それから、オープン当初に決めた「カンテ・グランデ」という店名。フラメンコの踊りで“大きな歌”、スラングでは“純粹に悲しい歌”という意味ですが、実は西インドから移動してきたジプシー達のものだと後で知りました。西インドは私が一番好きなところで、こんな偶然のつながりもあるものだなあ、と。」

学生時代、井上さんは美術部に所属、表彰されたこともあるという。「主に、油彩の抽象画です。描いては消し描いては足し、何度手を加えても、なかなか仕上がらないんです。

この店も、いろいろとインテリアを足したり動かしたりしていますが、その時いいと思っても、後日にまた気に入らなくなって、あれこれ手を加えています。“これで最終”というのは、たぶんないでしょうね。」

オーナー自身がキャンパスに油彩画を描くような、いつまでも完成しない独自の店づくり。それは、リバーサイドの秘密の隠れ家的…。濃厚なチャイの味とともに、手作り感あふれるやさしい空間で、何度でもゆったり、まったり、したいと思った。

上町台地、大阪城公園の南に位置する、玉造 2 丁目界限。「歴史の散歩道」を含め、緑が美しいプロムナードがあり公園も多い。

この辺りには、大阪女学院、浄星学園、玉造小学校、長堀通りを南下すると、明星学園、清水谷高校と、学園・学校が集まる。まさに文教地区。特にミッション系が目立つ。

<川口居留地からきたミッションスクール>

大阪女学院、高等部を訪れた。校内には、多種多様な樹木が茂る。ユーカリ、メタセコイヤ、フェニックス、ツタ、花みずき…。樹木は通りまで溢れ出し、町の空気を浄化しているようだ。1992年に大阪市施設緑化賞最優秀賞を受賞している。

ミッションスクールである大阪女学院は、川口居留地に源を発する。ミッションとは、「欧米の基督教の教会が主に外国に伝道するためにつくった団体」のこと。

西区川口町の外国人居留地にあった2つのミッションスクールが、移転も含めて明治37年に「ウエルミナ女学校」として合併。昭和15年、「大阪女学院」と校名が変更された。

<大名屋敷跡から学校へ>

大阪女学院学院史料室の吉住英和さんに話を聞く。

「学校の敷地はもと前田家の屋敷です。大阪城築城の際に謙讓された前田家刻印入りの石が2つ、校内に残っています。このあたりは、秀吉のまちづくりで大名屋敷が軒を連ね、大区画の土地が多い。地盤も頑丈で、学校施設に向いていたようだ。「居留地から引越してきた明治期、西成郡清堀村という地名の頃は、坪26銭位。柿の木だらけでした。柿の木は現在1本だけ残っていますよ。」

近くの浄星学園、明星学園などもミッション系だが、なぜこの界限に多いのか? 「上町台地で見晴らしがよく、大阪城、大手前の舎密局、造幣局や府庁、そして寺町など、政府

機関や日本の宗教的なものが並ぶようなエリアです。ミッション系の施設にとって、魅力的な立地だったのでは...」

<礼拝、行事、将来の夢>

大阪女学院では、基督教の教育と一般教育、両方が行われており、毎日礼拝がある。「天地万物の創造主によって生かされていること、互いに支えあい、相手を考え自分を大切にすることを教えています。」「明治20年頃から、良妻賢母よりは、学びを社会に生かして働く、という男性と同じ考え方でした。卒業後、社会的に活躍する人が多いです。」例えば、もと宝塚歌劇団の汀夏子さん、アメリカ村の創始者で空間プロデューサーの故・日限萬里子さんが出身者だ。

高校3年生の生徒さん(松谷侑紀さん、山路はるかさん、井上美穂さん、原由布子さん、矢野眞里加さん)に、学園生活について聞いてみた。

最近楽しかったことは?

(全員で)「体育祭!! 学年対抗なので、一丸となって燃えました!」

この学校に来て良かったと思うことは?

「礼拝です。最近その意味がわかってきた。」「みな個性が豊かで面白い。ぶつかることはあっても、イジメは全くない。」

将来の夢や学びたいことは?

「心理学関係」「哲学や宗教学」「福祉・社会学。困っている人を助けたい。」「英語を使って世界で活躍したい」

オードリヘップバーンやマリア・テレサの名前が出た。はじけるように笑う素顔は、映画や音楽、買い物大好きな女の子。学校では、行事を通して自己表現をする機会が多い。個を尊重する自由な校風が、生徒一人ひとりの瞳の輝きを応援しているようだ。

<細川ガラシャと聖マリア大聖堂>

玉造2丁目界限は細川ガラシャゆかりの地

でもある。細川ガラシャは、明智光秀の娘で、細川忠興の妻、玉子。父、光秀を滅ぼした秀吉が、キリスト教禁止令を発した時、受礼してガラシャとなり、迫害を恐れず信仰を深めた。関が原の合戦前夜、忠興が出陣中、人質をとろうとした石田光成に抗い、家臣に首を打たせ、屋敷に火を放った。その細川屋敷跡と伝わる井戸が「越中井」である。

「越中井」のある越中公園と同じ、細川忠興屋敷跡である区画に、「聖マリア大聖堂カソリック大阪司教座教会」が静かに建つ。淡クリーム色のタイルの外壁、聖母マリアの大理石像。エレガントな外観である。

聖堂内に入る。誰もいない。広く静かだ。左右壁には数々のステンドグラス。中央祭壇前には、キリスト受難の彫刻と、3枚の壁画。正面は、キリストを抱く聖母マリア、左に高山右近、右は細川ガラシャ。これら壁画は堂本印象の作品だ。2階には、パイプ数2400の巨大なパイプオルガンが鎮座している。

創立は、1894年。来日した宣教師が、大阪教区の司教座聖堂をこの場所に設立した。もとは川口居留地にあったが、戦争で焼け出され、大阪城近くで広い区画があったこの地へ。大阪大空襲で消滅後、1963年、現在の大聖堂が落成した。

細川ガラシャと直接の関係はないが、戦後の再建時には、地縁を大切に、細川ガラシャと高山右近の像や壁画を掲げたという。

< 国境を越えた、かけこみ寺 >

毎日曜日礼拝を行っている。午前中は日本語、午後からは、スペイン語、英語、ベトナム語と6回開催。日本語や英語の回は、100～200人の参列者があるという。

カトリック大阪大司教区教区本部事務局次長の神林宏和さんによると、「最近、外国人が増えています。フィリピンやブラジル、ペルーなど、カトリックの国の人たちが祈りに来ます。国や言葉は違っても、信仰心は同じだ。

「同胞に会って情報交換もしたいのでしょう。他にもいろいろな国の人が生活の悩み相談に来ますが、まずは味方になってあげます。」

まさに、インターナショナルな“かけこみ寺”だ。寺には参道があるが、この教会には、穏やかな町並みがアプローチになっている。

< 心を育む、都心の異空間 >

「教会は毎日あけています。心静かに祈りたい時、一人になりたい時、ここで30分間目をつぶってみてほしい。多忙な日々の中で、何もしない時間をもつということも大切ではないでしょうか。」

日常の喧騒を忘れられる異空間。都心だからこそ、貴重な「場」である。

川口居留地に着地したキリスト教の精神が、地霊のいたずらか、ガラシャのいた上町台地・玉造の町で育まれている。恵まれた環境での、学び、支えあい、自身との対話…。ヒーリングと愛情に満ちたやさしい風が、この町に通う人々の背中をそっと後押ししている。